



Vol. 38

PROFILE

1954年東京都出身。77年に俳優としてデビューし、ドラマ、バラエティー、舞台などで幅広く活躍。2007年にNHKみんなのうたでエコソング「MOTTA INAI」を発表。一躍大ブームになる。以降、公益財団法人日本ユニセフ協会の世界手洗い大使、ODA広報番組「地球VOCE」の海外レポーターを務めるなど、社会貢献活動に積極的に取り組む。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバー。

この夏、太平洋に浮かぶ国フィジーに行ってきました。日本の国際協力の現場を見ること。それが今回のミッションでしたが、まずはリゾートというイメージが強い国で日本が国際協力していることに驚きました。そこにはきっと、表には出ていない問題がたくさんあるに違いないと。ガイドブックに載っているフィジーが“光”だとしたら、それは“影”。その影の部分をしっかり肌で感じ、日本人が現地の人たちと奮闘している姿を見てきたと思いました。

国際空港がある海沿いの街ナンディはまさにイメージ通りで、青い海と手つかずの自然が広がっていました。そこから首都のスバに車で4時間かけて移動したのですが、首都に近付くにつれて、車窓から見える自然がどんどん少なくなっていました。ひょっとしたら、この国には発展と引き換えに起こった問題がたくさんあるのではないかと感じました。

それがまさにごみ問題。ライフスタイルの変化でプラスチックなど自然に還



らないごみが出るようになり、その分別や処理が追い付いていないそうです。そこで、私が現地に出会った青年海外協力隊員の方は、まずは草の根レベルから解決を図ろうと、生ごみを畑のたい肥として活用する“生ごみコンポスト”を普及し始めたのです。

彼の活動を見て感動したのは、地域の人たちをうまく巻き込み、信頼関係を築きながら取り組んでいるということ。聞くと、日本では地方自治体の職員をしているとか。日本での経験が開発途上国での活動に生きているのは実に素晴らしい。人生一度しかないのだから、日本の若者たちには協力隊員のようにどんどん外に出て行ってほしいですね。

フィジーには日本と共通の課題もありました。その一つが自然災害で、毎年大雨による洪水に悩まされているそうです。そこで、地震や津波、台風を多く経験してきた日本の出番です。災害時にみんなが避難できる施設を造ったり、降水量が規定値を超えたら音が鳴る装置を設置したりと、日本人専門家の

南の島の光と影

タレント ルー大柴

Lou Ohshiba

提案を受けて、地域の人たちの命を守るアイデアがあちこちに広まっています。

さまざまな課題に直面しているフィジーですが、どこに行ってもみんな明るく、陽気な笑顔で私たちを迎えてくれました。彼らのおもてなしの心は、言葉が通じなくても伝わってくる。とても楽しいひとときでした。

これまでいくつもの途上国を訪問していますが、私が皆さんに一番伝えたいのは、現地の人たちに寄り添い、活動している日本人がたくさんいるということ。何事にも懸命に打ち込む人の姿は美しい。そんな人たちがトゥギャザーすれば、世界はきっと、もっと良くなるはずだと信じています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索